

知的障がい児をもつ母親の内的変容

— 母子関係に着目して —

加藤 のぞみ

京都大学大学院教育学研究科紀要 第58号

2012

知的障がい児をもつ母親の内的変容

—母子関係に着目して—

加藤 のぞみ

I. 問題

1 障がい児を育てるとのこと

初めにこれまで行われてきた障がい児の母親についての研究を概観する。障がい児の母親における心理的研究の中で、長く研究されてきたものとして、受容研究がある。わが子が障害をもって生まれてきたことは、母親に大きな衝撃を与える出来事となり易い。そして、その衝撃から母親がどのような心理的過程をたどって回復し、わが子に障害があるということをもどのように受容していくのかということは、様々な研究者によって研究されてきた(三木, 1956; 鱧, 1963; Drotar. D. et al, 1975; Klaus. K. et al, 1976; Olshansky. S., 1962)。そこには母親が障がい児の誕生を「悲哀」「悲嘆」の体験として捉えながらも、子どもを育て共に生きる中で、そこに意味を見出していく過程が記されていた。例えば Rosen, L. (1955)は、「受容」が生成発展するものとし5つの段階「①問題に気づく段階、②問題を認める段階、③原因を捜し求める段階、④解決方法をさがし求める段階、⑤問題を受け入れる段階」を生成した。また、障害受容の過程は、一度きりで終わるものではなく、人生の転換期(新たな危機)に出会うたび繰り返される可能性があるものだと捉える研究者もいる(Olshansky, S., 1962)。一方で、受容研究に対する批判としては、夏堀(2003)がある。夏堀は、受容研究における受容の定義が研究者によって曖昧で、「障害児の親のあるべき理想の姿・役割を推奨するメッセージを伴っている」とも述べている。このように、母親の障害受容研究は、数多くなされてきたが故に、障害受容が当たり前のように起こるものとして、あるいは、障害は受容しなければいけないものとして積み重なってきてしまっている側面もあると思われる。

また、障がい児の母親の心理を探る研究としては、ストレス研究も盛んに行われてきた(新見ら, 1980; 吉田ら, 2009)。阪木(2005)は知的障害児・者の母親のストレスについて、子どもが高年齢化するにつれて母親のストレスが軽減していることが明らかとなり、これは「長年子どもと関わってきた経験により子どもの療育や発達への情熱が冷めてきている」からではないか、と述べている。このように、子どもの年齢によって、母親が感じるストレスも変化しているということがわかる。

これまでの研究では、母親の成長や心理的な変化が、一般的にどのような道筋を辿っていくのかということは十分に示されてきた。しかし、その道筋の中で、どのような心理的な揺れや動きを伴って変化をしていくのか、ということが十分に示されていないと考える。また、前述したように、障害受容は“しなければならぬもの”ではないはずである。受容という

ゴールに辿り着かなくとも、そこに至るまでや、その途中にいる苦悩や戸惑いにもっと焦点を当てることも必要ではないだろうか。また、母親が障害のある子どもと生きていく中で体験する、心の大きな揺れ動きには、母親と子どもの動きや成長、関係性の変化も影響していると考えられる。これは、ストレス研究での、子どもの加齢に伴ってストレスが変化していく、ということからも伺える。奥山(2006)は、母親が障害のある子どもを育てていく中で、「母親は強くもあり、熱意を持って何事にも一生懸命に子どものためにあらゆる方法でがんばっていく。母親が子どもの成長を願うと共に母親自身も様々な体験によって成長していくこと、親と子どもの相互作用が高められていることに気づいている」とし、障害のある子どもを育てていくことが、母親の成長にもなり、そこに相互作用が見られるということを述べている。

受容研究においては、母親の状態や心理の変化だけに焦点が当てられている傾向があり、ストレス研究においては、母親の内的な変化や、その過程を深く考察しきれていないように思われる。母親の内的変容過程と、その背景を母と子の両側面から考えるために、本研究では、その切り口として母子関係に着目する。

2 母子関係 —Winnicott の理論から—

母子関係を考えるにあたり、中でも今回は、Winnicott の理論を取り上げたい。Winnicott は、母子関係において、母子の同一化から分離へのプロセスを詳しく述べており、それは、本研究における母子関係の変化を検討する拠とすることができよう。

Winnicott, D. W. (1956/1990)は、母親が妊娠の終わりに向かって発達し、子どもの誕生後数週の間続く、「正常なる病気」とも言える状態を「原初の母性的没頭(primary maternal preoccupation)」と名付けた。¹これは、母親が乳児のニーズに繊細にまた感受性豊かに自らを適応可能にさせる状態であり、そこでは、一時的に人格のある側面が占拠してしまうとも述べている。Spitz, A. R. (1956/1965)も、この時期の母子について、「母と子とは、ある程度まで環境から分離されて法外に強い紐帯で結びつけられている」と述べていることから、この時期の母子が相当に強いきずなで結ばれていることがわかる。Winnicott によると、母親は初め、乳児のニーズにほとんど完全に適応し、母親の失敗を処理する幼児の能力が増大するのに従って、徐々にその完全な適応を減らして行くという。Winnicott はこれを「適応の失敗を差し出す」と表現した。そして、幼児が独立する必要のある速度で幼児から離れることは母親にとって並大抵のことではないということにも言及している(Winnicott, D. W., 1960/1977)。つまり、Winnicott は、母親とは子どものニーズに応じることができ、さらに子どもの成長に合わせてそのニーズへの応じ方を変化させることができるものとして捉えている。一方でそのように同一化に向けて、あるいは同一化から子どもの独立を促すように変化していくことは、容易ではないとも考えていることがわかる。

本研究では、母子関係において、Winnicott の言う「原初の母性的没頭」に着目し、それが、障害のある子どもを育てる母親にとって、どのように体験されるか、そして、そこからどのようにして抜け出していくのか、ということ、障がいのある子どもと母親の母子関係

¹ Winnicott, D. W. (1964/1993)では、「何週間か何か月続く」とも記述され、最早期の母子関係に限定して言及されているわけではない。

を考える出発点としたい。

3 障害のある子どもと母親の母子関係

障害をもつ子どもの子育てと、そうでない子どもの子育てには相違点があると思われる。先述したように、母子関係に着目すると、発達の遅れ、知的な遅れ、自立の遅れが母子一体化や母子分離などに影響を与えているとは考えられないだろうか。現に、障がい児の母親は加藤(2008)のインタビューの中で、子どもに障害がなければ自分の時間や母親だけの時間を持つことができる年齢に達しているはずの時期に、それができなかったということを語っている。このことは、母親が物理的に密着している時間が、障害のない子どもと母親よりも長いことを端的に示しているだろう。Winnicott, D. W. (1949/1990)は、知的に低い幼児に対して「母親はゆっくりと解放される」とも述べている。このことから、母親の解放には子どもの理解が必要で、その子どもの能力によって解放の早さが左右されるということがわかる。さらに、子どもの独立に必要となる「適応の失敗」を提供することは、障がい児の母親にとっては子どもを拒絶するような体験ともなり、深く根付いた母親の罪悪感とも関連して、適応の失敗を提供することが出来にくい状態に陥ってしまう可能性も考えられる。このことも、母子の濃密な二項関係の持続、言い換えれば、子どもにとってほとんど完全な母親であることを長く続ける要因になるとは考えられないだろうか。

さらに、障がい児の母親にとって、障害があるわが子は、障害のない自分とは決定的に違う存在となる。Winnicott, D. W. (1960)は、「母親が幼児との同一化を通じて幼児の感じるものを知り、抱っこの時や環境からの供給の時に幼児の求めるものをかなりの確実と与えることができる」ことを述べ、母は、同一化なしには子どもの求めるものを与えることができないとしている。このような同一化は障がい児の母親にも見られると考えられるが、そこから「適応の失敗」を差し出す段階に至るまでの間に、子どもの障害に気づき同一化がゆらぐ可能性もあろう。そうであるならば、母親が幼児の求めるものに応えることのできない現実をどう受け止めるのだろうか。

以上を踏まえて、本研究では、知的障がいをもつ子どもの母親からみた母子関係の変化の様相を捉えることで、そこに何が関連しているのかを丁寧に考察していくことを目的とする。また、その上で、これまでの研究で言われてきた内的変容がなぜ起こるのかを、Winnicottの理論と調査で見られた母子関係の変化から考えたい。

II. 方法

1 調査協力者

特別支援学校に通学する知的障がい児の母親8名にインタビュー調査を行った。母親、子どもの平均年齢(SD)と範囲、子どもの障害名、子どもの男女比は(表1)の通りであった。

なお、障害名は協力者の記述通りとする。また、協力者の子どもは1名(軽～中度)を除き、重度の知的障害であると判定されている。²

² 8名の母親のうち、6名は障害のない子どもの子育ても経験していた(兄姉5名、弟妹1名)。

(表1)協力者とその子どもの基本情報

母親の平均年齢と範囲	42.25(5.39)、R=38-54
子どもの平均年齢と範囲	11.25(3.24)、R=8-17
子どもの障害名(人数)	自閉症(5)、知的障害(2)、広汎性発達障害(1)、筋ジストロフィー(1)
子どもの男女比(男:女)	7:1

2 調査場所

調査は、協力者からの要望がない限り、確認を経た上で協力者の自宅で行った³。

3 調査方法

調査は、半構造化面接と、やまだ(1987)の日誌研究を参考に筆者が独自で作成した冊子を用いて、1人の協力者につき2回行った。乳幼児研究における日誌研究の長所として、やまだ(1987)は、「研究者の側からおこす行動ではなく、乳児の側から自発的に行う行動の記述ができること」を挙げている。今回の調査においても、冊子を書く母親が意識的に子どもに働きかけるのではなく、子どもとの間に自然に起こった出来事を書き留めてもらうことが可能となる。冊子は『一日で、1番印象的だったやり取り、エピソードを描いてください』という教示を添えた表紙1枚と、1エピソード当たり1枚で3枚分の内容ページ、計4枚で構成しており、協力者には、書ける範囲で1枚以上書いてもらうようにした。また、出来るだけ、そこにいた全員の動きや反応、感じ方を含めて書いてもらい、母(協力者)は必ずしも登場しなくても良く、登場しない場合はそれを見聞きして感じたことを併せて書いてもらうこととした。これは、母親の在不在に関係なく、印象に残るやり取りを書いてもらうことで、現在、彼女が子どものどのようなところに注目しているかを見ることが出来るという狙いがあった。そして、この冊子を元に、調査時にその詳細を聞くことで、実際の母子のやり取りを語ってもらうことが出来ることと、意識して子どもの行動に目を向けてもらうことにより、今自分がどんな風に子どもと接しているのかを感じてもらうことも可能になると考えた。

第一回調査は、(表2)のような流れで行われた。半構造化面接であり、協力者の語りに応じて、語りの流れを損なわないように臨機応変に質問数を調整した。

(表2)第1回調査における流れおよび質問内容(Aは子どもの名前)

- ①インタビューに際して、受諾書の確認、サインを行ってもらう。
- ②インタビューに入る。
 - ②-1 子どもとの関係について。幼少期はどんな感じだったか。
 - ②-2 それは今と変わっているか、変わっていないか。
 - 変わっているところは、どういったところか。
 - 変わっていないところは、どういったところか。
 - ②-3 今の子どもとの関係について思うこと。
 - ②-4 将来のこと、自立していくことについて。
 - ②-5 離れていくことを寂しく感じるか、感じたことはあるか。
 - ②-6 自分の知らない子どもの一面を見た時にどう感じるか。
 - ②-7 子どもの成長をどう感じているか。
 - ②-8 Aくん(ちゃん)を生み、育てたことで変化したことはあるか。

(表3)第二回調査における流れおよび質問内容

- ①前回の受諾書のないように変わりが無いことの確認を行う。
- ②インタビューに入る。冊子を見せてもらう。
 - ②-1 具体的にはどのような状況でどんなことが起こっていたのか。
 - ②-2 そのやり取りをどんな風に感じたか。
 - ②-3 これを書いてみてどうだったか。
 - ②-4 第一回インタビュー時に気になったことを聞く。
- ③2回分の謝礼を渡す。

³ 自宅で行うのが難しい協力者には、自宅以外の場所(福祉施設、喫茶店)で行った。

第二回調査では、記入済みの冊子を元に、エピソードの詳細やなぜそれを書こうと思ったかなどを中心に聞いた。さらに、その中でも今どんなことがわが子との間で起こっているのか、どういうことを考えて子育てをしているかなどに着目し、語りに応じた質問を行った。調査の流れと質問項目は(表3)の通りだった。

Ⅲ. 結果・考察

1 日誌の内容から

第二回調査までに全員から1つ以上のエピソードが書かれた冊子を受け取ることが出来た。エピソード数は全部で17あり、1人の協力者から平均で2.13エピソードが得られた。協力者の中には、最近幼少期よりも子どもとの距離ができてきたことにより、見落としがちだった子どもとの関係を、冊子を意識的に書こうとすることによって、もう一度見直すよい機会になったと語った方もあった。また、冊子には子どもの成長や母親がハッとする出来事が多く書かれており、それらが母親の心の中に残りやすいものだという事もわかった。さらに、大変だったエピソードなどは書かれることが少なく(1例)、ほとんどが肯定的に捉えることのできるエピソードであったこともその特徴として挙げられる。これは、今回調査した方の子どもの平均年齢が11.25歳だったこともあり、母親の子育て経験の積み重ねや子どもの成長によって母親が“大変だ”“困る”“わからない”と感じる出来事が減っていったからだと考えられる。一方、少数ではあったが見られた、困るエピソードには、子どもが思春期になったことで、新たなわからなさを感じ、これまでのやり方がどうも通じないようでわからないというものもあった。子育て経験の積み重ねや子どもの成長は、子育てをしていくにあたって母親の中に芯を作っていくと同時に、経験によっても理解し難いことが出てくることにも繋がる。また、子どもの方も、成長したことで、今まで以上に自分の欲求や気持ちを感じ、それを伝えたいという思いが表れてくると考えられ、母親はそこにどう関わってすべきか迷い、そのことが、子育ての指針の立て直しを迫るものともなる。さらに、このエピソードからは、子ども側の変化を待つだけでは解決しきれないことや、子どもに関係する他者の存在があるが故に解決を急がないといけなことも語られた。このことは、子どもの成長過程に母親の関与を必要とする期間の長さや、その関与の強さを物語っていた。

2 インタビューの分析

協力者である障がい児の母親から得たインタビューデータは、文字に起こし、M-GTA(修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ;木下2003,2007)によってまとめた。インタビューデータは8名で計約17.25時間(139,500文字)になった。また、インタビューに要した時間は1回当たり平均64.7分だった。M-GTAによる分析方法は以下の通りである(木下2003:2007の提唱した分類方法に従って概念化をし、カテゴリーにまとめ、図示する)。

まず、文字に起こしたデータを調査を行った順に概念化した。概念化に当たっては、この研究の分析テーマである“障がい児の子育てにおける、母から見た母子関係はどのようなプロセスを辿るのか”ということに着目し、それに関連するであろう箇所を具体例として取り出した。そしてその具体例から定義を作り出し、その上で他の類似具体例を説明できると

考えられる概念を生成した。同様に、残りのデータからも既に生成したものとは異なる概念の元になる具体例を見つけたり、すでに生成した概念を説明できる類似の具体例を抜き出した。どのデータからも、新しくでてきた具体例に対しては新しい概念を作った。このとき、木下(2003,2007)に倣い、ワークシートを概念ごとに作成し、概念とその定義、具体例を書き入れた。また、具体例が豊富に出てこなかったり、特定の人のみの具体例しか出てこなかった場合は、その概念は有効でないかと判断し廃止するか、他の概念と統合できないか検討した。概念の完成度は、「類似例だけでなく対極例との比較によってなされることにより、解釈が恣意的に偏る危険を防ぐ」(木下,2003)ので、対極例との検討を概念ごとに行い、ワークシート上に理論的メモ欄として記入していった。今回の調査からは派生概念を含む38の概念が生成され、その中から具体例が特定のの人に偏らず、複数例ある21概念が採用された。残りの17概念は、採用した概念に合併するか、特定の人のみの場合は廃止した。採用した概念と廃止・合併した概念は表4、表5の通りであった。またその定義は表6に示した。

表 4 概念の一覧 () はバリエーション数 ⇔ は反対概念	
概念 1: 子どもの社会化を考えた子育て (29)	⇔ 概念 12
概念 2: 意識的で、母親にとっても“修行”のいる子離れ (14)	
概念 3: 時間の流れによって感じる限界、将来のこと (11)	
概念 4: 子どもに対するわからなさ、見えなさ (35)	
概念 5: 子育ての指針・充実感 (16)	
概念 6: 母親に必要な準備、体勢の安定化 (12)	
概念 10: 障がい児の母親特有の感覚 (8)	
概念 11: 子どもの目線への接近 (21)	
概念 12: 成長の実感 (50)	
概念 13: 母親は子どもの一番の理解者、そこからくる心配、困難 (26)	
概念 14: 母親の考えが全てではないと言う気づき (6)	
概念 15: 時間の経過に伴う、気持ちの変化、余裕の表れ (4)	
概念 16: 子どもに対する理解の拡大化 (2) → 概念 13 に付随	
概念 20: 子どもの障害による母親の社会化 (5)	
概念 21: 外的知識による、子ども理解の促進 (18)	
概念 22: 子どもの障害に合わせた母親の外的変化 (3)	
概念 23: 周りの子との違い (21)	
概念 24: 外的指標による諦めや理解 (5)	
概念 26: 分離できない関係だという捉え方 (15)	
概念 28: 子どもの存在による母の狭小 (8)	

派生概念 23: 親側への誘引 (12)	

表 5 廃止概念の一覧 () はバリエーション数 → は統合概念 ≒ は類似概念	
概念 7: 子どもの社会化に向けた動き (2)	→ 概念 1 あるいは派生概念 23
概念 8: 子どもの障害に対する罪悪感 (2)	
概念 9: 母親の生き方 (3)	
概念 17: しっかりする存在としての母親 (2)	→ 概念 13
概念 18: 子どもの社会化 (1)	≒ 概念 7
概念 19: 母子分離を促した出来事 (1)	→ 概念 6
概念 25: 社会化による弊害とその克服 (3)	→ 概念 1
概念 27: 普通の子育てにおける母親観との違い、専門的な動き (4)	
概念 29: 幼少期の一体感の意義 (3)	
概念 30: 思考よりも、現実対処を優先 (1)	→ 概念 24
概念 31: 外部に向けた怒り (3)	
概念 32: 生活の潤滑化による充実感 (1)	
概念 33: 障がい児のいる現状の受け止め (1)	→ 概念 24
概念 34: 普通だと思っていた子育て (3)	
概念 35: かわいさの再燃・離れたくない気持ち (1)	
概念 36: 病気の進行による不安、心配 (5)	
概念 37: 成長を促進させることを期待しない動き (1)	

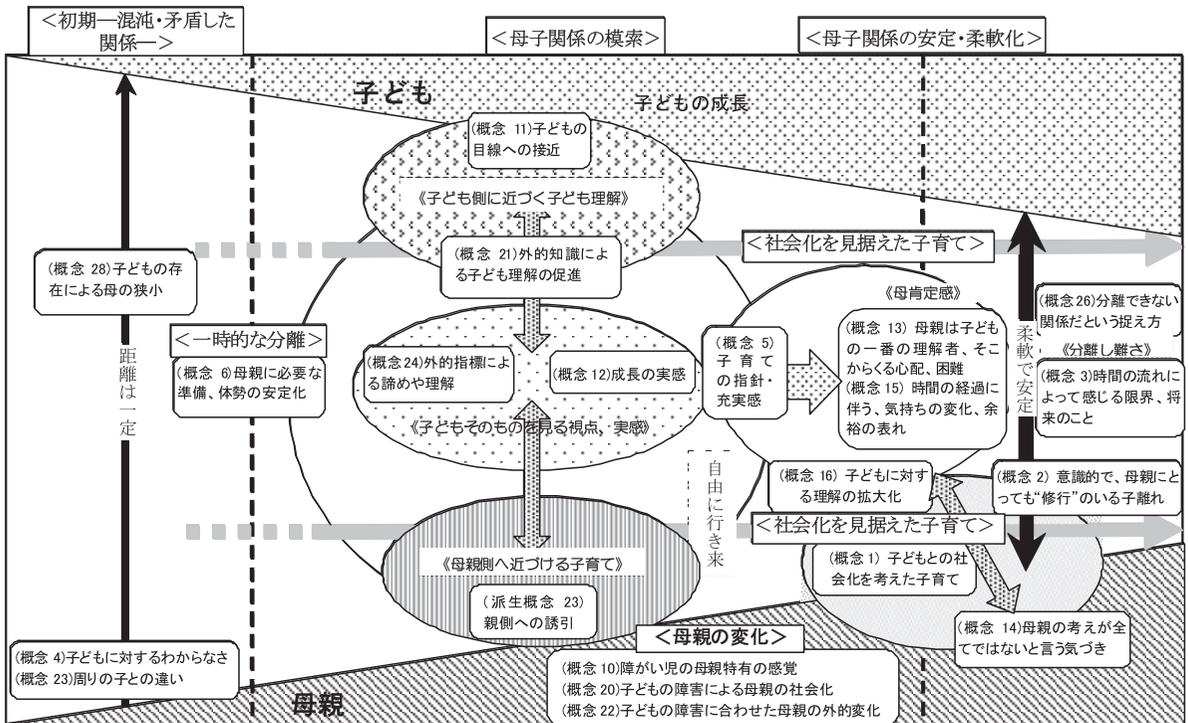


図1 母子関係の変化の様相(概念を加えたもの) <>:カテゴリ、《》:下位カテゴリ、():概念

ここには、<初期—混沌・矛盾した関係—>を発端とし、<一時的な分離>を経て、<母子関係の模索>を進めていく中で、親自身も変化したり(<母親の変化>)、子どもの成長を目にしたりし、母と子の関係が充実していくことが表れていた。また、子どもとの距離が遠く、一方通行であった母子関係から、母親がダイナミックに動くことのできる母子関係への変化がみられた。そこから、母は子育ての指針や、母親が母親たる自信につながる《母肯定感》というようなものをみつけ、子育てや母子関係の根本を、時間をかけて徐々につくりあげていった。そして、<母子関係の安定・柔軟化>に辿り付くが、まだ母親にしかなできないことが多く、そこに障がい児と母親の《分離し難さ》が同時に見られた。しかし、ゆくゆくは離れていかないといけないという現実が背後に迫っており、安定した母子関係の中でも葛藤を抱えた関係であることがわかった。また、<社会化を見据えた子育て>も母親の役割となっており、それを目指した子育てをする一方で、発達がゆっくりで、純粋なわが子をまだ愛おしく思うことが母親の子離れのし難さとして存在し、より複雑な母子関係をつくりあげていたこともわかった。

3 M-GTA で図示した母子関係の変遷と母親の変容

調査協力者の母親から語られた変化としては、車を運転するようになったという現実的なもの(概念 22)から、子どもが障害をもったから、人の前に出て話をするようになったという親の社会化を促進するもの(概念 20)、さらに、障がい児を育てていなければ全く違う自

分になっていただろうという、親の内的変化を象徴するものなどが見られた(概念10)。これらは、生まれた子どもに障害がなければ、起こりえなかったことであり、障害のある子どもの子育てが“普通の”子育てとは違うのだという実感を伴った語りとなってそれぞれの人に表れていた。

また、＜母子関係の安定・柔軟化＞の過程の中で、母親は子どもと、“私”との間で、様々な試行錯誤を繰り返しながら、お互いの成長も伴って、充実感や満足感を得るようになっていくことがわかった。そうして、子育ての指針(概念5)がある程度固まってくると、暗中模索の状態から、先が見えてくることで、子育ては安定したものへと変化していく。これが概念13、概念15の“母親としての自分”に対する肯定感となって還ってくると考えられる。障がい児の子育てにおいて、この感覚が得られるかどうか重要なポイントとなるのではないだろうか。それは、これまでがき苦しんできた中で、子どもを通して新たな世界と出会い、新たな考え方に触れてきたことが、従来持っていた“私”が一度崩れ去るような体験にもなり得ると考えられるからだ。一度崩れた後、新たに積みあがってきたものに“肯定感”を得られるということは、母親がこれから生きていく上での芯となり、支えとなるだろう。この芯となる部分が障がい児の母親には必要となってくるのではないだろうか。ある人は、障害のあるわが子を育てていくにあたって、親が揺れてはいけない、そうでないと子どもが混乱してしまう、と語っていた。通常、母親の中で“こういう風に育てていこう”と気持ちが固まっていくのは、おそらく意識的に行われる作業ではないだろう。しかし、障がい児の子育てに当たっては、子どもが自分の足で踏み出し、成長していく力が弱いので、育て方に関して比較的意識的になり易いことが想像できる。また、一度崩れた子育ての指針が少しずつ少しずつ積み重なっていくことは、新たなものを母親が取り入れていく作業であるが故に、実感を伴う必要があり、非常に時間がかかるものとなろう。それと同時に、その積み重ねをしていく時間、実感を得ていく時間の大切さも強く感じる。そうして、母子関係が安定し、母親に肯定感が実感できて初めて、子どもと自分との関係を捉え直し、再構築していくことができるのだろう。さらに、そのような行為自体は、母親が自分自身を問い直す契機にもなる。

4 Winnicottの母子関係に立ち返って

さて、ここで今回見られた母子関係の変化の様相をWinnicottの考えた母子関係を手掛かりに改めて考察していきたい。本調査の結果から、子育ての初期の段階で、子どもとの一体感の抱きにくさ、子どものわかりにくさが存在することがわかった。これは、Winnicott, D.W. (1960/1977)のいう「原初の母性的没頭」が阻害されている、あるいは、その状態に陥りにくいことを示唆していると考えられる。それでも他の母親と同じように子どもに繊細に応じることが求められ、さらに前述したように「適応の失敗」を差し出していくことに時間がかかるのであれば、「原初の母性的没頭」がかりそめの形で長く続くことが考えられる。子どもは他の子どもと同じように欲求を向けるが、それに対して母親はかりそめの“没頭”で対処しなければならない。このことは、調査から見られた混沌の状態に加えて母親の混乱を大きくする要因と考えられるだろう。

橋本(2000)は、Winnicott が一体感から分離という一方向の成長の筋を想定しているとした上で、「母親であることにともなう一体感と分離のテーマは繰り返され、何度もめぐってくるものであって、容易に克服されるものではない」としている。障害をもたない子どもの母親にとっても、容易に克服されるものではない一体化と分離は、物理的に分離することが難しく、子どもの自立によって母親の自立が促されるといった、子どもからの働きかけの弱い障がい児の母親にとっては、より困難な作業となることが想像できる。また、子どもとの一体化と分離を自らの手によってコントロールしなければならない障がい児の母親は、母と子の関係性におけるバランスを殆ど全て、自分自身で調整しなければならないとも考えられる。そういった理由から、母親は、よりいっそう育児に力を注ぎ、集中せざるを得ない状態にあるとも考えられよう。そのコントロールの中で自らの中に良いバランスを見つけ、安定した母子関係を築けるということは、我々が想像している以上に大変な作業だろう。しかし、そういった子育て経験を少しずつながら積み上げていくからこそ、障がい児の子育てとそうでない子育ての相違を身をもって知ることとなり、自身の子育てに対して肯定的な意味を見出せるまでになるのだと思われる。

障がい児との母子関係を安定させ、子育てに対する充実感を得られるのは、障がい児の母親であれば誰でも容易に出来ることではないと考え、なかなかそこに辿りつけずに苦しむことも当然として起こってくるだろう。そして、苦しむ過程があるからこそ、色々な試行錯誤を繰り返し、母と子の中で何度ももがくことができるとも考えられる。コントロールが困難であるからこそ苦しみがあり、しかし、その苦しみを経なければ、適度に柔軟で心地よい母子関係には辿り着けないのであろう。

5 母子関係の変化による母親の内的変容

ところで、本研究で見られた母子関係の変化に伴う母親の内的変容はどのようにして起こったのだろうか。母子関係が変化してくることで子どもに対する見方や考え方が変わったり、自分自身にゆとりが出て世界の見え方がそれまでと変わってくることで、母子関係の充実を感じることができる、という一連の流れがあった。そこから、“母親肯定感”を得ることによって、障がい児を産んでしまった自分としてではなく、子どもに障害があるという事実を認めた上で障がい児の母としてその人生を享受する方向を見つけないことが可能になるのだろう。山中(1986)は自閉症児の母親と面接するにあたって、母親が自分で子どもを育てていく自信をもつこと、自分が引き受けることの確認を忘れないようにしなければならないと述べている。このことから、母親が“母親”となっていく過程が、意識的になされていることがわかる。子どもとの間で様々な積み重ねを繰り返していくことで、「母親としての自尊心を傷つける(橋本, 2000)」子育てではなく、子どものことを1番理解しているのは自分だという自信に繋がる子育てへと変化していく。母子関係において“母肯定感”を得られることは、母としての私を肯定することにも繋がるだろう。母親である自分が今行っている子育てを間違っていなかったと感じられることは、初期の頃からその実感が薄く“どうしたらわが子に近づくことが出来るのか”“どうしたらこの子がこの子らしく生きていけるのか”を模索し続けた障がい児の母親にとって、母親として“私”が選択してきたこと、子ど

もと共に生きてきたこれまでを肯定することに繋がるのではないだろうか。一瀬(2007)は障害のある乳児を持つ母親の苦悩が「自己」と「関係」が表裏一体のように循環している構造であるとし、「我が子に対するくわからないことへの不安」や「受け容れられない苦悩」はそのままダイレクトに自己イメージに混乱をきたす原因となる」と述べている。自己イメージに混乱をきたした母親が、母子関係の中で回復し、肯定感を得ていく。母子一体となった母子関係の中での混乱だからこそ、母子関係の中でしか癒されることができない。そして、その癒しを経て、母親が“母親”として、“私”に立ち返っていくことが重要だと思われる。

混乱の中で“私”が“母親”となり、そして再び“母親”から“私”へと還っていくプロセスがここに見出される。その“私”と“母親”は決して切り離されるものではなく、二面性を帯びているものでもない。“私”は“母親”であり“母親”は“私”，という表裏一体の存在である。しかし、いつまでも母親の役割を背負い、子どもに対して関わるだけの存在であるならば、母親の存在は子どもなくしては語れなくなってしまふ。それでは、子どもの存在が手放せなくなり、子どもの社会化に向けての働きも弱くなってくるであろう。母親のコントロールで子どもとの関係を調整できるのであれば、母親が“私”としての自分を取り戻さない限り、容易にここに陥ってしまうことが考えられる。これは、障害を持つ子どもと母親が永遠に一緒にはいれないことを考えると良いことだとは言えず、共依存の関係でしかないとも言えよう。子どもがその子どもらしく生きることと同じように、母親が“私”らしく生きることが大切である。子育てを通じて“私”らしさを取り戻すことは、子どもが子どもの人生を歩む第一歩に繋がると同時に、母親にとっても、“障がい児の母”ではない側面を生きることに繋がらう。そして、その“私”は“母親”である私と切り離して生まれるものではなく、同時に存在するものとして母親の中にあるだろう。

<付記>

本論は平成 21 年度京都大学大学院教育学研究科修士論文の一部に加筆・修正したものである。調査に協力してくださった皆様と、ご指導下さった角野善宏先生、高橋靖恵先生に深く感謝いたします。

文献

- Drotar, D. Baskiewicz, A. Irvin, N., et al. 1975 The Adaptation of an Infant With a Congenital Malformation: A hypothetical Model *PEDIATRICS* 5 710-717
- 橋本やよい 2000 母親の心理療法 母と水子の物語 日本評論社
- 一瀬早百合 2007 障害のある乳児をもつ母親の苦悩の構造とその変容プロセス—治療グループを経験した事例の質的分析を通して— 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要 13 19-31
- 加藤のぞみ 2008 障がい児と共に生きる母親—“個別性”への転換— 京都大学教育学部卒業論文(未刊行)
- 木下康仁 2003 グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 弘文堂
- 木下康仁 2007 ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて 弘文堂

- Klaus, M. H. and Kennell, J. H. 1976 *Maternal-infant bonding; the impact of early separation or loss on family development* The C.V. Mosby Company 竹内徹他・柏木哲夫訳 1979 母と子のきずな：母子関係の原点を探る 医学書院
- 三木安正 1956 親の理解について 精神薄弱児研究 1 4-7
- 夏堀撰 2003 障害児の「親の障害受容」研究の批判的検討 社会福祉学 44(1) 23-32
- 新美明夫・植村勝彦 1980 心身障害児をもつ母親のストレスについて：ストレス尺度の構成 特殊教育学研究 18(2) 18-33
- 奥山朝子 2006 障害児をもつ母親の体験談を聴講しての学生の学び 日本赤十字秋田短期大学 紀要 10 33-38
- Olshansky, S. 1962 Chronic Sorrow: a Response to Having a Mentally Defective Child *Soci-al Casework* 43(4) 190-193
- Rosen, L. 1955 Selected Aspects in The Development of The Mother's Understanding of Her Mentally Retarded Child *American Journal of Mental Deficiency* 59 522-528
- 阪木啓二 2005 知的障害児・者の母親のストレスについての一考察 精華女子短大研究紀要 31 1-8
- Spitz, R. A. 1956 Die Entstehung der Ersten Objektbeziehungen : direkte Beobachtungen an Säuglingen während des ersten Lebensjahres 母-子関係の成りたち：生後1年間における乳児の直接観察 古賀行義訳 1965 同文書院
- 鎌幹八郎 1963 精神薄弱児の親の子供受容に関する分析的研究 京都大学教育学部紀要 9 145-175
- Winnicott, D. W. 1949 Mind and its Relation to the Psyche-Soma. In *Through Paediatrics to Psycho-Analysis*. 心とその精神—身体との関係 北山修監訳 1990 児童分析から精神分析へ ウィニコット臨床論文集Ⅱ 岩崎学術出版社 127-146
- Winnicott, D. W. 1956 Primary maternal preoccupation. In *Through Paediatrics to Psycho-Analysis*. London: Hogarth/Institute of Psycho-Analysis. 原初の母性的没頭 北山修監訳 1990 児童分析から精神分析へ ウィニコット臨床論文集Ⅱ 岩崎学術出版社 205-213
- Winnicott, D. W. 1960 The theory of the parent-child relationship. In *The Processes and the Facilitating Environment*. London: Hogarth. 親と幼児の関係に関する理論 牛島定信訳 1977 情緒発達の精神分析理論：自我の芽生えと母なるもの 現代精神分析双書 第Ⅱ期第2巻 岩崎学術出版社 32-56
- Winnicott, D. W. 1964 The newborn and his mother 新生児と母親 成田善弘・根本真弓訳 1993 赤ん坊と母親 ウィニコット著作集第1巻 岩崎学術出版社 45-59
- やまだようこ 1987 ことばの前のことば ことばが生まれるすじみち 1 新曜社
- 吉田優英・宗方比佐子・都築繁幸 2009 軽度発達障害児の母親のストレス因子に関する研究 障害者教育・福祉学研究 5 85-93

(臨床心理実践学講座 博士後期課程2回生)

(受稿 2011年9月2日、改稿 2011年11月25日、受理 2011年12月26日)

Internal Transformation in Mothers of Children with Mental
Retardation:
Focusing on the Mother-child Relationship

KATO Nozomi

This study considers how mothers of children with mental retardation waver through bringing up and living with their children. The participants in this study were eight mothers whose children had intellectual disabilities, including autistic disorder, and were registered at special support education schools. The data collected were based on semi-structured interviews and reports in which the participants recorded impressive communication of a day. The interview was conducted twice per a participant. The data were analyzed using the Modified Grounded Theory Approach. The results indicated that the mothers acquired affirmative maternal feelings through attempts to sense the distance with their child, and through the growth of mothers and children. As a result, the mother-child relationship became stable and they could maintain a flexible relation with their child. Moreover, this will lead to taking steps forward in the life of the child and the mother will provide the room for their own life again.